

しずおかけんはまつし
静岡県浜松市

へ だ びら
辺 田 平 21 号 墳

2009

(財) 浜松市文化振興財団

例 言

1. 本書は、浜松市浜北区平口で実施した駐車場建設に先立つ「辺田平21号墳」の発掘調査報告書である。
2. 辺田平古墳群の発掘調査は、浜北市教育委員会による浜北新都市開発整備事業に係わる範囲確認調査を1次とし、本調査を2次とすると3次調査に当たる。
3. 調査期間 現地発掘調査 2009年 2月 9日～ 2月 28日
整理・報告作業 2009年 5月 1日～ 9月 30日
4. 調査面積 632㎡
5. 調査体制 調査委託者 朝日電装株式会社 代表取締役社長 手嶋光裕
調査受託者 財団法人浜松市文化振興財団（理事長 庄田 武）
調査指導機関 浜松市教育委員会（生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行）
調査担当者 小粥良和・川江秀孝・関根章義・藤森紀子（生涯学習課文化財担当）
清水香枝（浜松市文化振興財団）
6. 原稿は、川江秀孝が執筆した。
7. 調査に係る費用は、全額委託者が負担した。
8. 本書に係る諸記録は、浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。

本文目次

第1章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査経過	
第1節 範囲確認調査	5
第2節 本調査	5
第3章 調査成果	
第1節 検出した遺構	6
第2節 遺物の出土状況	9
第3節 出土遺物	11
まとめ	13

挿図目次

第1図 辺田平21号墳の位置と周辺の遺跡	2
第2図 内野古墳群分布図	3
第3図 辺田平古墳群分布図	4
第4図 試掘トレンチ配置図	5
第5図 辺田平21号墳全体図	7
第6図 土坑実測図	8
第7図 出土土器実測図	11

図版目次

写真図版1 A 発掘前遠景	B 発掘前近景	C 試掘トレンチ 周溝検出状況
写真図版2 A 遺構検出作業風景	B 発掘完了後全景	C 発掘完了後全景
写真図版3 A 21号墳 掘了全景	B 土坑1 検出状況	C 土坑1 礫群横断面
写真図版4 A 土坑1 掘了	B 土坑2 検出状況	C 土坑2 礫除去後
写真図版5 A 土坑3 検出状況	B 土坑3 掘了	C 土器出土状況1
写真図版6 A 土器出土状況2	B 土器出土状況3	C 土器出土状況4
写真図版7 出土遺物（須恵器・土師器）	17・18・20・22・23・24・3	

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

遺跡の位置 辺田平古墳群はJR浜松駅の北約10kmの距離に位置し、浜松市浜北区南西部の平口にある。浜北区の地形は、①北部の山地および丘陵、②三方原台地、③その他の河岸段丘からなる地域、④扇状地状の平野からなる地域、に区分される。②～④は天竜川の形成した地形である。②は天竜川が形成した河岸段丘のうち、最も広い面積を占めるもので、浜北区の西部から中区、北区、西区へと広がっている。この最上面は三方原面と呼ばれている。③④は②よりも低位な段丘で、三面認められる。高位から富岡面、老ヶ谷面、浜北面である。三方原面の東縁は比高差20m程の段丘崖で、その下が富岡面である。富岡面と老ヶ谷面との段差は緩やかで、明確な段丘崖は見られない。浜北面は、西鹿島から平口にかけて南に広く分布している。その南に④の扇状地が広がり、西側では扇状地の一部が浜北面を覆っている。平口から内野にかけての地域は、低湿地の氾濫平野が形成されている。この低湿地は、一般に、田中州あるいは自然堤防などに見られるが、この地域の場合は、馬込川など扇状地上の小流路の堆積物が、三方原台地から流れ出した小川川の微粒物質をせき止めて、平口～内野～半田地区に肥沃な低湿地を形成したものと考えられる。

河岸段丘の縁辺部には無数に侵食谷が刻まれている。内野地区には、富岡原と辺田原を侵食した大きな谷が2本あり「二本ヶ谷」の地名の起源になっていて、それぞれ西谷・東谷と呼称される。また、谷底には段丘から崩落した砂礫で埋まり、河岸段丘のような平坦面をつくっている。積石塚はこのような谷底の平坦に築かれている。辺田平古墳群は、東谷の左岸側で、谷頭付近に位置する老ヶ谷面に築かれている。21号墳は辺田平古墳群で現在確認されている中で是最北に占地している。

第2節 歴史的環境 (第1図)

旧石器時代 半田町下滝遺跡・半田山Ⅲ遺跡、有玉西瓦屋Ⅱ遺跡で細石核、ナイフ型石器等が出土しているが、量・質共に希薄で、足跡を認める程度に過ぎない。宮口樋池遺跡ではナイフ型石器、スクレーパー、細石刃、細石核が採集されている。浜北段丘上にあり、上面を黒ボクと呼ばれ黒色腐植土が厚く覆っていて、遺跡の保存状態は比較的良好と思われる。今後の調査に期待したい。

縄文時代 侵食されて舌状丘陵状になった河岸段丘面から、しばしば石器が採集されるが、大概の場合、遺物包含層は流亡していて、遺構・遺物供に貧弱である。僅かに、古墳の封土下に遺物包含層が残存していることがあり、基盤層の礫層に刻まれた遺構が検出されることがある。東区瓦屋Ⅰ遺跡は早期末～中期初頭ころの遺跡で、小穴、炭化した木の実を内蔵した土坑などが検出された。瓦屋Ⅱ遺跡は前期～後期の遺跡で、中期初頭を主体とする竪穴住居跡、土壘、落とし穴、小穴群が検出された。地蔵平遺跡では中期初頭の竪穴住居跡、土壘、土坑、小穴と晩期前半の土器棺が検出されている。東区下滝遺跡群では、早期末～晩期までの土器と石器が、少量ではあるが遺跡の全域で出土している。遺構は、遺跡のほぼ中央部で前期の竪穴住居跡が、南端付近で中期の住居跡が検出されている。染地遺跡は二本ヶ谷の開口部付近に占地し、下滝遺跡の乗る河岸段丘崖に沿って流れる旧染地川の左岸にある。全面に浜北段丘面で見られる黒ボクと同質の黒色腐植土が覆っている。ここでは中期初頭の土壘が検出された。浜北区富岡大谷遺跡では中期後半の竪穴住居跡が検出されている。

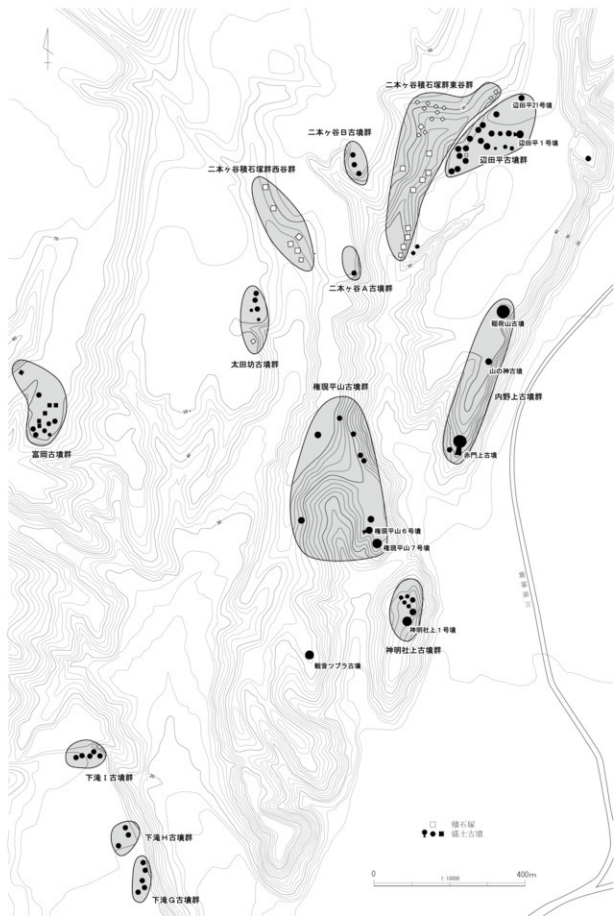
弥生時代 前期に遡る遺跡は知られていない。半田山Ⅰ遺跡と下滝遺跡では中期前葉の土器棺墓や中期中葉～後葉、後期の方形周溝墓群が検出された。瓦屋ⅠA古墳群では後期初頭の円形周溝墓が検出された。その他、扁平片刃石斧と有孔磨製石鎌を出土させた染地遺跡が知られ、舟岡山遺跡では土器が採集されている。いずれも、平口～内野～半田に広範に形成された肥沃な沖積平野を眼下に望む位置に営まれた集落であるが、住居跡等の遺構は検出されていない。また、沖積地の遺跡は確認されていない。



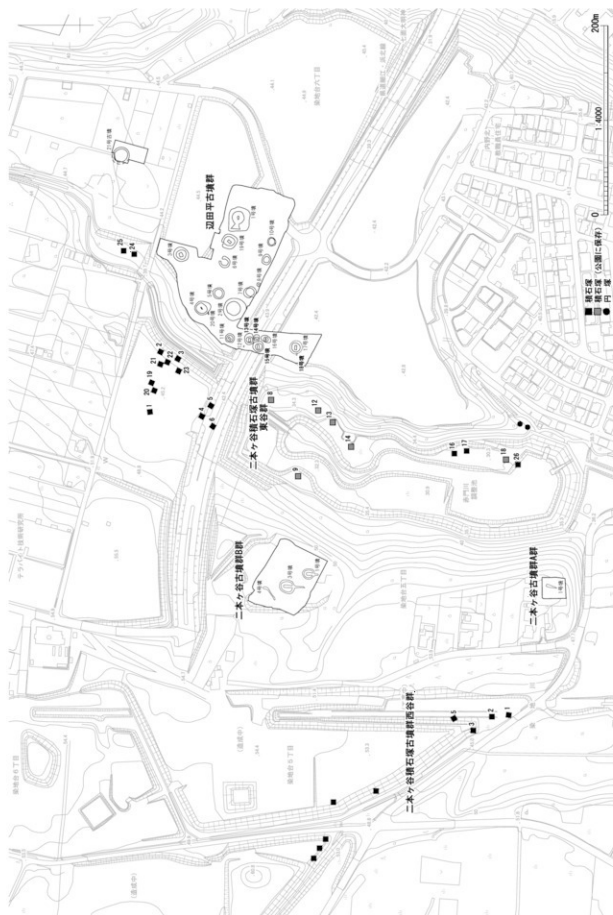
第1図 辺田平21号墳の位置と周辺の遺跡

古墳時代 下滝遺跡群で方形周溝墓が確認されている。弥生時代から引き続き集落が営まれた、住居跡など集落本体は発見されておらず、規模等は分からない。古墳時代前期中葉以降、内野地区を中心に古墳群が形成される(第2図)。三角縁神獣鏡や柳葉形銅鏡を副葬した赤門上古墳は、大和政権と密接な関係を保ちつつ、三方原周辺の有力首長層と共に、後の遠江国の前段階としての地域首長として活躍した者の墓と考えられている。次いで、前期後半ないしは中期前半代には、定角式銅鏡を副葬した権現平山7号墳が築造される。中期には神明社上1号墳、稲荷山古墳、観音ツブラ古墳、積石塚古墳群、辺田平1号墳が築かれた。積石塚古墳群は、その立地が谷底であること、円礫を積上げだけの低平な墳丘であること、内部主体は礫層(床)ないし木棺直葬であり、副葬品が希薄であること等々から、渡来系の被葬者が想定されている。中期から後期にかけて築造された辺田平古墳群は、積石塚、前方後円墳、円墳、その他で構成されている。瓦屋西C古墳群で辺田と同様の群構成が見られる。積石塚は千人塚平C古墳でも高塚古墳群中で確認されており、積石塚の被葬者を考える上で参考になるかもしれない。中期後半から後期前半では、横穴式木室を内部主体とする古墳が多く築かれている。後期中葉ないし後葉になると、太郎坊古墳群、富岡古墳群、下滝古墳群、半田山古墳群などで横穴式石室を内部主体とする円墳群が築かれる。

下滝で7世紀の集落が検出された以外、住居跡を有する集落は確認されていない。



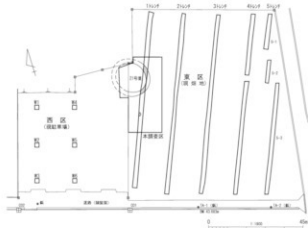
第2図 内野古墳群分布図



第3図 辺田平古墳群分布図

第2章 調査経過

第1節 範囲確認調査



第4図 試掘トレンチ配置図

溝の南側で円礫が充満した直径約1.5mの土坑を検出した。写真撮影の後、用地南側道路に打設されたコンクリート製境界杭を測定の基点CO1とCO2として、検出した遺構を記録した。

第2節 本調査

現地調査は、2008年2月3日から2月28日まで実施した。試掘調査により、直径約1.5mの円墳1基と、土坑が複数存在すると考えられることから、調査範囲を700mに定めた。

- 2月3日(火) 本調査に先立ち、発掘予定地内の現況地形測量を行う。耕作と試掘で地形が改変されていることから、溝が検出された植垣周辺に限って1m毎に土地の標高を計測した。10cmの等高線を求めたところ、墳丘の高まりと思われる楕円形の等高線を3本引くことが出来た。
- 2月6日(金) 用地内に存在する植垣とみかんの伐間について業者と打ち合わせる。休憩・資材保管用のコンテナハウスとトイレを設置する。土嚢・ブルーシート等の発掘資材を現地に搬入する。
- 2月8日(日) 樹木の伐間終了を待って、調査着手前の現況を写真撮影する。
- 2月9日(月) 重機による表土除去作業を開始する。主体部付近の攪乱層から須恵器碎片が出土する。
- 2月10日(火) 重機掘削を続ける。整地作業と伐根作業を行う。攪乱層から須恵器短脚長方形スカシ有蓋高坏と内面に同心円文を残す高坏の蓋が出土する。溝の検出作業を進める。周溝を巡らした内径約13mの円墳と確認できたので、辺田平21号墳とする。墳丘の中央部に植垣が存在し、その西側には筆境溝が掘削されている。このため、主体部は攪乱されている可能性が高まった。墳丘の東端部に楕円形の土坑が検出された。重機の作業を完了する。
- 2月12日(木) 発掘区南半部について、重機掘削後の面を整地する。試掘調査で確認した礫群を土坑1とする。礫を露呈させて掘り方の検出作業を行う。発掘区の南東部で、径1.5m程の礫が集積した土坑が見えた。これを土坑2とする。
- 2月13日(金) 筆境溝の周辺から須恵器片の出土が相次ぎ、Ⅲ期前半ころと確認できた。この段階では、内部主体を横穴式木芯粘土室か土壘(木棺直葬)の可能性が高い。この二者を想定して主体部を追求することにした。主体部検出作業に支障となる切り株の除去作業を終日行う。
- 2月16日(月) 伐根作業の後、周溝の検出を進める。植垣西側の地境溝(攪乱)を掘り進める。須恵器高坏が出土する。墳丘東南部で検出した土坑を土坑3とし、掘り進める。土層断面を計測する。

- 2月17日(火) 周溝を掘り進める。墳丘の南側で黒色土層中から土師器の鉢が出土する。礫群の上面を清掃して写真撮影の準備に入る。実測に備えて基準点(水糸張り用の釘)を打設する。
- 2月18日(水) 周溝を掘り進める。土師器の鉢が溝底から数センチ上で出土する。土坑1の礫群を精査して写真撮影と断面図を作成する。土坑2で実測用基準点を打設する。
- 2月19日(木) 古墳の南西裾付近は、駐車場建設の攪乱が及んでいた。それでも精査して周溝の検出を試みた。攪乱溝の断面に溝と思しき土層が見えたが検出できなかった。攪乱層から須恵器高坏の脚端部片が出土する。周溝内の土師器出土状態を写真撮影し、実測してから取り上げた。土坑1を掘り進める。発掘区全体の遺構を測量する。
- 2月20日(金) 雨天のため現場作業を中止する。土師器の洗浄と、記録の整理作業を行う。
- 2月23日(月) 土坑1と2を掘り進める。1は深さ約1.5mまで掘り進めたが底まで到達しない。一見、井戸跡のような形状をしている。遺構の性格を決める確固たる証拠が見つからない。
- 2月24日(火) 土坑2を精査する。主体部の検出を試みたが、検出できない。
- 2月25日(水) 発掘区内の清掃と資材の片付けを行い、写真撮影の準備を行う。
- 2月26日(木) 排水作業、清掃の後、全景と各遺構の写真撮影を行う。遺構の補足測量を行う。土嚢袋・シートなど発掘資材を片付ける。
- 2月27日(金) 発掘資材を神原町埋蔵文化財事務所へ運搬する。トイレ・コンテナハウスを撤去する。
- 3月1日(月) 出土遺物を台帳へ登録し、注記、復元を開始する。埋蔵文化財発見届など書類を作成する。2009年3月に実測図、写真等の資料整理と、出土遺物の注記作業を行った。5月から土器の接合、石膏復元、実測、写真撮影を行った。

第3章 調査成果

第1節 検出した遺構

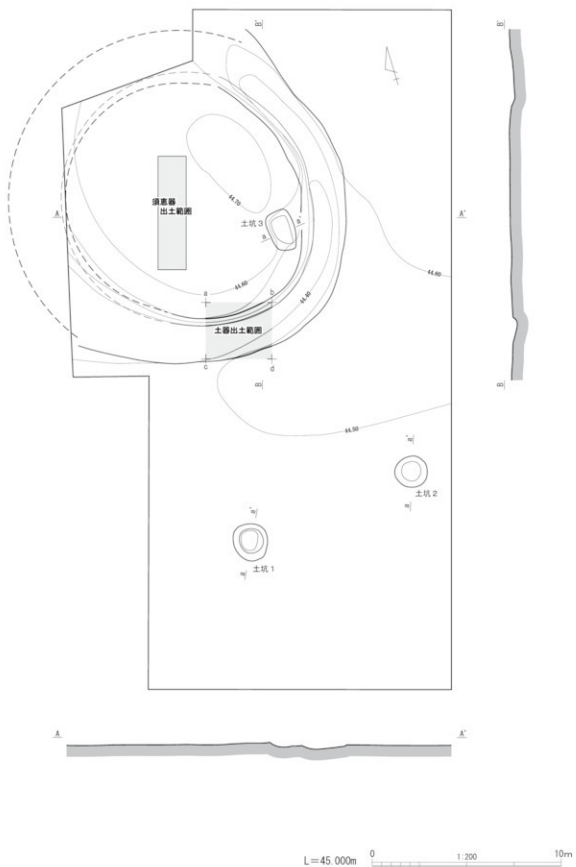
21号墳 試掘調査で周溝の一部を検出した。本調査では全形の検出を試みた。墳丘上の西側3分の1付近に、幅50cm、深さ50cm程の筆界溝が南北方向に掘削されており、その西側は駐車場の攪乱が及んでいた。筆界溝の東側1m付近には防風用の植垣があり、墳丘の中央部付近を南北方向に幅約1.5mに亘って大根が張っていた。このため、墳丘の北半部と西半部では何も検出できなかった。

周溝 墳丘東側の周溝を検出した。黄色の砂礫粘土層(地山)を掘り込んだ幅約2.3m、深さ0.18~0.23mの溝である。下層に黄色粘土層がレンズ状に堆積し、その上に有機物混じり暗褐色粘土層が覆っていた。また、黄色粘土層に乗った状態で土師器が検出された(第7図)。最深部は、溝の内側外郭線から0.5m入った位置で、ここが墳裾のように見える。内縁で直径11.5m、外縁で直径16mを測る。

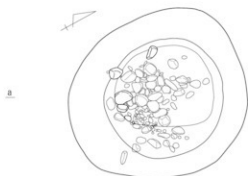
墳丘 古墳を含めて周辺一帯は開墾されていて、発掘前の目視では墳丘を確認できていなかった。試掘調査で周溝を検出したことから、そのつもりで観察し直したところ、植垣に沿って僅かに高まりが認められた。そこで、詳細に地形測量を実施して等高線を描いたところ、墳丘の中央部付近で10cmの等高線が楕円形に3本描くことが出来た。周溝検出面の標高44.6m、現況面最高位の標高45.0mであり、0.4mほど墳丘が残存している計算になる。しかし、盛土(封土)のように見えても、盛土と認められる土層は確認できなかった。

ほぼ半円形に検出され周溝の最深部を墳裾とすると、直径12.5mの円墳である。古墳の裾に幅約2.3mの周溝が巡るとすると、直径11.5mである。古墳の築造は、当時の表土上に盛土される場合が多い。盛土の範囲を墳丘と捉えれば、直径11.5mと考えるのが妥当かもしれない。高さは分からない。

内部主体 地山面を精査したが検出できなかった。盛土内に築かれていたため、削平されたのであろう。6世紀になると、多くの場合、地山を掘り込んだ横穴系の主体部が採用され始める。このことから、整

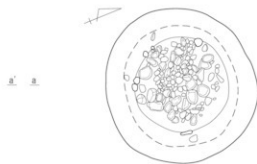


第5図 辺田平21号墳全体図



a

a

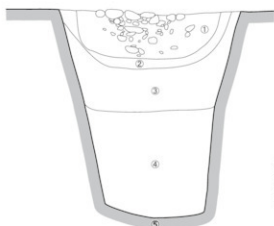


a' a

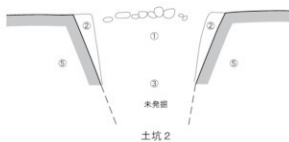
a'

a' a

a'

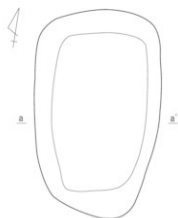


土坑 1

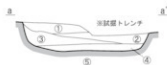


土坑 2

- ① 黄色砂礫まじり粘土層
- ② 黄色砂礫まじり粘土層 (地山土)
- ③ 黄色砂礫まじり粘土層
- ④ 黒色粘土と黄色粘土の互層
- ⑤ 黄色砂礫まじり粘土層 (地山)



土坑 3



- ① 黄色砂礫まじり粘土 (地山土再増積)
- ② 暗黄色粘土
- ③ 暗褐色粘土 (田黄土に近似した色調)
- ④ 暗褐色粘土と灰黄色粘土の互層
- ⑤ 黄色砂礫まじり粘土層 (地山)

L=45.000m



第6図 土坑実測図

穴系の土壙か木棺直葬であったと可能性が強いと思われる。

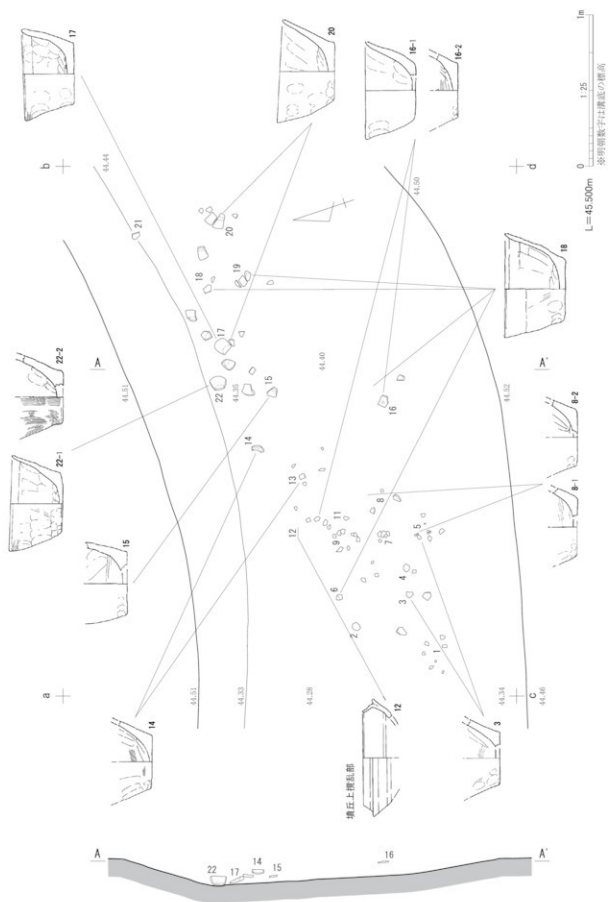
土坑1 (第6図) 21号墳の南約9mの位置で検出した。黄色砂礫混じり粘土層⑤を掘り込んだ平面形が円形で、直径1.8m、深さ2.15mを測る竪坑である。底部には、薄い黒色粘土帯を挟み黄色粘土④が深さ1.0m付近まで堆積している。その上部に黒色砂礫混じり粘土③がレンズ状に堆積している。このレンズの底には厚さ0.2m程に黄色砂礫混じり粘土②が鍋底状に堆積している。この鍋底には地山の円礫が密集していて、礫の間隙に炭化物など有機物を多量に含む黒色粘土①が充満している。礫の配列等に規則性は認められない。坑に無作為に礫を投棄したように感じられた。①の堆積状態を見ると、②で坑の全体が埋まった後に直径1.2m、深さ0.5mの穴が穿たれ、しばらくの間、水や塵埃が堪る状態であり、そこに礫が投棄されたかのように観察される。むしろ、坑に何か物を納めた後、坑から掘り出された粘土で全体を被覆し、上面に礫を敷並べた。しばらくすると納めた物が腐敗し、粘土・礫が陥没した。陥没した所に雨水や塵埃が堪ったのであろうか。出土品は無く、敲き(三和)の痕跡は無いが、いわゆる野甕(貯水槽)であろうか。なお、三方原台地上で1960年ころまで使われていた種イモ貯蔵穴に似ているとの指摘があった。

土坑2 土坑1の北東約9mの位置で検出した。直径1.6mの円形である。中央部は直径1.2mの範囲に深さ0.7mまで黒色粘土①があり、円礫が充填していた。①の回りは②で、下では③が確認できた。④は掘削しなかった。土坑1と同様の機能を持った竪穴であろう。

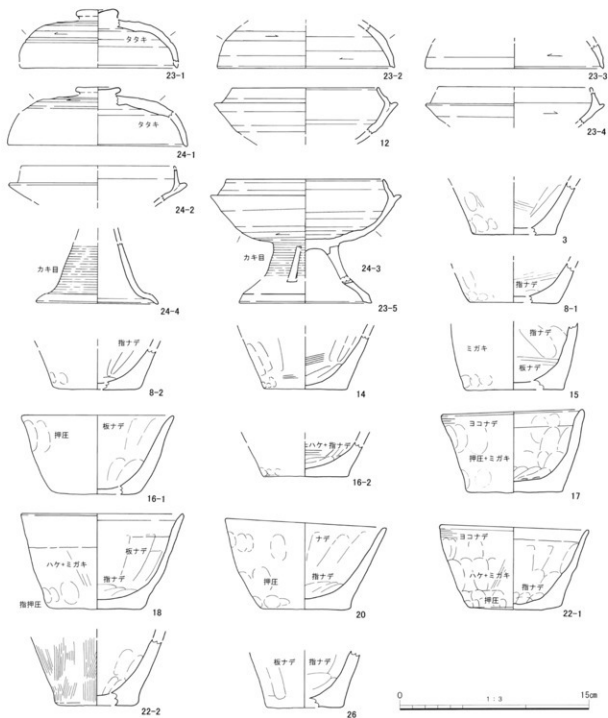
土坑3 21号墳の東裾で検出した。不整形な楕円形を呈している。これは、試掘トレンチ1で南東角を削平したため、本来、南辺と北辺は対照形であり、隅丸長方形であったと考えられる。現況で長軸2.2m、短軸1.3m、深さ0.3mを測る。覆土の堆積状況を見ると、底には黄色土塊を含む暗褐色粘土④が水平に堆積している。その上に西側(墳丘方面)から有機物を含む暗褐色粘土③が流れ込んでいる。②の暗黄色粘土が堆積した後、黄色で礫混じり粘土(地山土)①が覆う。③は古墳の盛土下に見られる当時の表土層に酷似している。①は地山土の再堆積土であり、土坑を被覆した際の土砂であろうか。平面形からして、木棺を納めた土壙のように思えるが、木棺の痕跡は認められない。21号墳の主体部にしては墳丘の中央部から離れすぎている。辺田平18号墳と同様の古墳が想定できるが、礫床や遺物など、古墳と証明する資料は得られていない。

第2節 遺物の出土状況

墳丘の中央部から西半部にかけて、防風用積垣と筆溝溝による攪乱が著しかった。攪乱部を掘削したところ須恵器片が出土した(第5図須恵器出土範囲)。同一個体が数m離れて検出された。特に出土位置は記録しなで遺物番号23に一括した。土師器は1~2cmの細片が数片検出された。土師器は脆いので攪乱時に破砕されたとも思えるが、肉厚の底部破片すら検出されないのは、土師器の副葬が少なかったためであろう。墳丘南側で(第5図土器出土範囲)、周溝内に堆積していた有機物混じりの暗褐色粘土層を除去したところ、4m×1.5m範囲に土師器の鉢片が散乱していた。ほぼ半割り状態が3点、他は大半が2~5cmの細片であった。多くが溝底に堆積した黄色粘土層に乗る状態で出土した。細片は、一つに括って取り上げた。第7図に出土状況を図示し、遺物台帳に出土標高を示した。第7図の明朝の数字は溝底の標高である。15・17~20・22は比較的大破片であり、墳裾近くで出土している。22は溝底から10cmほど浮いた状態で出土したが、他は溝底にほぼ密着していた。21は溝の駆け上がり部で、墳丘上に近い位置で出土した。その他の細片は、墳裾(溝縁)から1~3m離れ、溝底から10cm以上浮いて出土した。この範囲で須恵器は1点出土したに過ぎない。この須恵器12は墳丘上攪乱部で検出した破片と接合した。これらのことから、土器は周溝内に置かれたものではなく、墳丘上に供献されていたものが崩落したことが知られる。また、墳丘の南東部に土師器が、中央部から南西部付近には須恵器が主体に置かれたものと推定される。また、土師器が周溝の縁から2m離れて出土している事は、墳裾より傾斜がきつい高位(墳頂部付近)から転落したことを物がっていると思われる。



第7図 周溝内土器出土状態



第8図 出土土器実測図

第3節 出土遺物

須恵器と土師器がある。いずれも細片で、総個体数は確認できない。須恵器は形態と焼成の違い等から9個体を数え、第8図に示した。23-1は高坏の蓋である。天井部の内面に摘接合時の同心円叩き目があり、外側に摘み剥離痕が残る。坏部は突出した稜を持たず、緩やかな沈線を刻む。口縁端部を欠く。23-2は坏蓋である。坏部には稜を設けており、天井部は比較的平である。口縁端部は緩やかな段（凹線）を施して内傾させる。耀黒色を呈する。23-1と稜のつくりが異なることから坏蓋と考えたが、天井部を欠損していて確定できない。23-3は坏蓋である。口縁端部は段を施して内傾させる。細片で詳細は分からない。24-1は高坏の蓋であ

る。天井部の内面に同心円叩き目があり、外側には摘み剥離痕が残る。口縁部を欠く。12は坏身である。墳丘上擾乱部で検出した破片と、周溝で検出した破片が接合した。立ち上がりは内傾し、坏部に比べて短い。口縁端部は丸い。受部断面は上部を平めて三角形につくる。復元口径11.3cm、受部復元径14.4cmを測る。23-4と24-2は坏身である。口縁端部と坏部の多くを欠く。24-3は有蓋高坏である。脚端部を欠損する。立ち上がりは内傾し、口縁端部を丸くつくる。受部断面は上部を平めて三角形につくる。坏部の底はやや丸目で、下半の3分1付近までへら整形されている。内面に脚接合時の同心円叩き目が残る。脚部には長方形スカシ窓が三方に穿たれている。また、粗いカキメ整形が施される。口径12.6cm、受部径14.8cm、坏部の高さ5.2cmを測る。灰色で、珪岩粒を含んでいる。12の坏と形態が近似し、同一固体の可能性はあるが、ノタメの位置、器壁の質感、復元径などが微妙に相違することから別固体とした。23-5は高坏の脚端部である。スカシ窓の下半部に該当する。24-3との接点はないが同一固体の可能性が高い。下部部はほぼ水平である。24-4は高坏の脚部である。脚端部は丸く、比較的鋭角に外突出している。上下を変えて見ると、端部径が9.6cmなのに頸部の径が4cmと細く、受口状の形態で、廳に近似している。他方、廳固有の突線(稜)ないしは沈線と、頸部の波状文が見られない。むしろカキメを丁寧に施していることから無窓の高坏脚と考えた。

遺物台帳 ※出土地点毎に複数の破片を一括して取り上げた。接合できたものは、大破片の番号にまとめた。

遺物番号 図版番号	名称	出土位置 検出高(海拔)m	備考 (単位cm)
1	土師器鉢 口唇部	周溝 44.43	未実測
2	土師器鉢 底部	周溝 41.43	未実測
3	土師器鉢 底部	周溝 44.42	P.5と2片接合
4	土師器鉢 底部	周溝 44.44	小破片 未実測 P.22と同一固体か
5	土師器鉢 口唇部 底部	周溝 44.44	小破片 未実測 口唇部はP.16と同一固体か
6	土師器鉢 口唇部 体部	周溝 44.38	小破片 未実測
7	土師器鉢 口唇部 体部	周溝 44.41	小破片 未実測
8-1	土師器鉢 底部	周溝 44.44	P.5と接合 小破片 未実測
8-2	土師器鉢 底部	周溝 44.44	小破片 未実測
9	土師器鉢 体部	周溝 44.40	小破片 未実測
10	土師器鉢 底部	周溝 44.40	小破片 未実測
11	須恵器坏	周溝 44.40	小破片 未実測 灰白色
12	須恵器坏身(高坏か)	周溝 44.47	P.26、27と接合 灰色 頁岩粒 口唇丸 復元受部径 14.4 cm 復元口径 11.3 cm
13	土師器鉢 体部	周溝 44.44	P.14と接合
14	土師器鉢 底部	周溝 44.42	P.13と接合
15	土師器鉢 底部	周溝 44.44	
16-1	土師器鉢	周溝 44.47	P.10と接合 復元口径 12 cm 器高 6.2 cm 茶灰色
16-2	土師器鉢 底部	周溝 44.47	小破片 未実測
17	土師器鉢	周溝 44.35	P.26接合 口径 11.2 cm 器高 6.5~5.2 cm 茶褐色
18	土師器鉢	周溝 44.40	P.6・19・16と接合
19	土師器鉢	周溝 44.36	P.18接合
20	土師器鉢	周溝 44.44	P.17接合 口径 12.7 cm 器高 7.2~6.5 cm 茶褐色
21	土師器鉢	周溝 44.39	小破片 未実測
22-1	土師器鉢	周溝 44.34	P.16接合 口径 11.7 cm 器高 6.7~6.3 cm 茶褐色
22-2	土師器鉢 底部	周溝 44.34	P.15接合 未実測1あり ハケ整形 ミガキ無し
23-1	須恵器高坏蓋	墳丘上擾乱層	灰色 摘剥離痕 口唇部欠損 天井部に同心円叩き目
23-2	須恵器坏蓋	同上	黧黑色 頁岩粒 口唇は段を有し内傾 復元径 14 cm
23-3	須恵器坏蓋	同上	灰色 口唇は段を有し内傾 復元径 14 cm
23-4	須恵器坏身(高坏か)	同上	灰色 頁岩粒 口唇部欠損 復元受部径 14 cm
23-5	須恵器高坏脚端部	墳丘上擾乱層 44.38	P.24-③との接点なし 復元底径 10.5 cm 灰黑色
24-1	須恵器高坏蓋	墳丘上擾乱層	灰色 頁岩粒 摘剥離痕 天井部同心円叩き目
24-2	須恵器坏身(高坏か)	同上	黧黑色 受部復元径 14 cm
24-3	須恵器高坏	同上	脚端欠損 口径 12.6 cm 受部径 14.8 cm 灰色 頁岩粒
24-4	須恵器高坏脚(須恵部小)	同上	端部は丸く、尖り気味 灰色 頁岩粒 底径 9.6 cm
25	土師器鉢体部 底部	周溝	小破片一括 未実測
26	須恵器坏身 土師器鉢	同上	小破片一括 未実測
27	須恵器坏身	墳丘上擾乱層	小破片一括 未実測

土師器はいずれも鉢形である。すべて溝溝内で検出した。底部で13個体を数えた。底部から口縁まで残存するものは5点で、そのうち4点は半分以上残存する。図示した以外に、異固体であり、図化不能な口縁部と底部の破片が若干残っている。したがって、総点数は13以上である。出土状態と接合状況を第7図に示す。なお、掘り出す過程で現地から遊離した破片は遺物番号25～27に纏められた。

土師器鉢の製作は、珪岩・雲母・長石の細粒を混ぜ込んだ粘土生地を用いて、円形の底をつくり、そこに丸輪にした粘土帯を二段積み重ねる。粘土帯の接合は、内と外に指先を押し当てて密着させる。内面は、底板（一段目）の面を指先で平行に撫でて二段目の粘土同士を密着させ、二段目と三段目（口縁部）は下から上に向かって撫で上げて指頭押圧痕を消す。粘土が密着して成形できると、外面はハケ整形してから縦方向にミガキ整形される。内面はユビナデ以外に、イタナデ整形される場合がある。回転台を用いて口縁部は整形され、比較的尖った口唇部をつくっている。口縁部にはヨコナデが残る。乾燥させた後、焼成されて赤褐色の鉢形土器が出来上がる。器壁に黒班が残るものや、内面が黒色に仕上がるものがある。

3は復元底径6.6cm、現存高4.1cmを測る。8-1は復元底径7cm、現存高3.1cmを測る。8-2は復元底径8cm、現存高3cmを測る。内面は赤褐色、外面は灰黒色である。14は底径6.6cm、現存高4.2cmを測る。外面は赤褐色で、内面は灰褐色である。16-1は底径7cm、器高6.2cm、復元口径12cmを測る。茶灰色で、器壁の風化が著しい。16-2は底部破片である。17は底径8.4cm、器高6.5～5.2cm、口径11.2cmを測る。指頭で押圧成形してからミガキ整形している。外面は風化が著しい。内部に意味不明な約5mmの爪型刺突痕がある。18は底径7.2cm、器高7.6cm、口径12.8cmを測る。内面は黒色で、外面は茶褐色である。20は底径8.4cm、器高7.2～6.5cmを測る。22-1は底径8.8cm、器高6.7～6.3cm、口径11.5cmを測る。茶褐色を呈する。22-2は底部復元径6.6cm、現存高さ5.3cmを測る。口縁部は欠損している。赤褐色で黒班が残る。口縁部は他の鉢に比べると聞き気味であり、器壁が肉圧であることから、甕の可能性も考えられる。26は復元底径6.2cm、現存高4.4cmを測る。

土師器鉢形の出土例は比較的少ない。5世紀後半以降、須恵器が主で土師器が少ないことと関連していると思われる。そんな中、当古墳と同時期の学園内2号墳（千人塚2号墳）から、高坏4、壺2、椀6、鉢15が出土している（浜教委1998）。副葬品の全貌は分からないが、鉢形が量的に突出している点が注目される。

まとめ

辺田平古墳群は、5世紀後半～6世紀中葉頃にかけて造営された初期群集墳である。今次調査の21号墳を加えて、前方後円墳1基、方墳1基、円墳15基、土壙2が確認された。これらは、木棺直葬、礫棚（床）など盛土内（封土）に内部主体を設けたA群と、地山を掘削した土壙に円礫を多用した礫棚状の内部主体を設けたB群とに大別されている（浜北教委2000）。A群は5世紀後半に築造が始まり、6世紀前葉頃に盛行する。B群は6世紀前葉頃に築造されて盛行し、6世紀中葉頃まで築かれている。21号墳から出土した須恵器の特徴は、①長方形スカシ窓を三方に穿った短脚有蓋高坏である。②身の受部径14.8cmと大型である。③坏部の高さ4cmに比して、立ち上がりは1.2cmと短い。④また内傾し、端部は丸い。⑤坏部の底部はやや丸みを帯び、ヘラ整形の範囲が底から3分1付近までと狭い。⑥坏蓋口縁端部の内面に沈線を施して内傾する。⑦脚部はカキメ整形されている。これらの特徴から、遠江編年のⅢ期前葉、陶邑編年のTK10段階に該当している。遺物番号12の坏片が土師器と伴出しているため、土師器も須恵器と同じ年代観が与えられる。これらのことと、地山に内部主体が刻まれていないことから、21号墳はA群が盛行した時期の古墳と言える。

21号墳とほぼ同時期の古墳群を、東区有玉西町の瓦屋西B古墳群と瓦屋西C古墳群に見ることができる。瓦屋西B古墳群は須恵器編年Ⅱ期～Ⅳ期にかけて、前方後円墳1基と円墳12基が築造された。内部主体は木棺直葬3、横穴式木室4、横穴式石室5である。同じく瓦屋西C古墳群はⅡ期～Ⅳ期にかけて前方後円墳1基、方墳1基、円墳29基、積石塚1基、土器棺3基、土壙8基が築造されている。内部主体は木棺直葬2、横穴式木

室8、横穴式石室14、その他である。三方原周辺における古墳の内部主体は、須恵器編年Ⅱ期以降、堅穴系から横穴系へと漸移する。横穴式石室はⅢ期前葉の浜北区興覚寺裏古墳が初出で、Ⅲ期中葉の古段階には普遍化している。横穴式木室はⅡ期に採用され、Ⅲ期中葉で一定の盛行を見てから、瓦屋西古墳群で横穴式土室としたC33・34号墳や、四つ池古墳群で見られる内部主体などに変質したと思われる。横穴式石室は各地域に於いて首長墓に一早く採用されるが、静岡平野では石室に先行してⅢ期中葉の古段階に伊庄谷横穴墳（静教委1963）が築かれる。同様に、掛川市堀ノ内古墳ではⅢ期中葉の古段階の横穴式木室が確認されている（掛川市2000）。このことから、瓦屋西古墳群が特異な例ではなく、Ⅲ期前葉ないしはⅢ期中葉の古段階の群集墳で、石室・木室・横穴など横穴系内部主体が普遍的に採用されたことが知られる。

辺田平古墳群では全域の調査が完了していないので、その全貌は分からないが、群集墳が盛行し始める段階で横穴系の内部主体を採用がないこと、および、内部主体を地山に掘り込んだ土壇に櫛羅（床）としている点に特徴を見出すことが出来る。

21号墳で出土した土器の年代観を古墳の築造時期と考えるが通例である。また、墳丘や周溝から異時期の遺物が発見されると、後世に墓前祭が行われたと考えるのが一般的である。ところが、古墳の盛土は、第1次墳丘と第2次墳丘の2段階で行われ（文化協会1998）、第1次墳丘に土器が供献される例が判明してきた。瓦屋西B3号墳はⅡ期の墳丘で、内部主体はⅢ期前葉である。瓦屋西C5号墳はⅢ期前葉の墳丘で、内部主体はⅢ期中葉である。同様の例は瓦屋西B2号墳、瓦屋西C10号墳に見られる。21号墳では、周溝に堆積した盛土からの流入土に乗った状態で検出された土器は、第1次墳丘から転落した可能性が考えられる。従って、21号墳の墳丘はⅢ期前葉に築造され、Ⅲ期前葉か、それ以降に埋葬されたことも考えられる。辺田平2号墳と4号墳では、異なる時期の須恵器が出土している。これも単なる埋葬後の墓前祭と見るだけではなく、2重墳丘の例を考えても良いかもしれない。

参考文献

- | | | | |
|--------------|------|----------------------------|-----------------------------|
| 国学院大学考古学会 | 1957 | 静岡県北浜町二本谷積石塚古墳とその背景（予報） | 上代文化 第27輯 |
| 静岡市教育委員会 | 1963 | 駿河伊庄谷横穴墳 | |
| 浜北市教育委員会 | 1975 | 遠江内野古墳群 | |
| 浜北市教育委員会 | 1993 | 浜北市内野古墳群 | |
| 浜北市教育委員会 | 2000 | 内野古墳群 | |
| 浜北市 | 1989 | 浜北市史 通史 上巻 | 浜北市の自然環境 |
| 掛川市 | 2000 | 掛川市史 資料編 古代・中世 | |
| 浜松市道跡調査会 | 1984 | 半田山古墳群A小支群 半田山Ⅲ道跡 | |
| 浜松市教育委員会 | 1988 | 半田山古墳群（Ⅳ中支群） | |
| 浜松市教育委員会 | 1991 | 瓦屋西古墳群 | |
| 浜松市教育委員会 | 1998 | 千人塚古墳、千人塚平・宇藤坂古墳群 | |
| 財団法人 浜松市文化協会 | 1986 | 四つ池古墳群 | |
| 財団法人 浜松市文化協会 | 1991 | 有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | |
| | | 上巻 -瓦屋西C古墳群- | 下巻 -地蔵平A・B古墳群 瓦屋西Ⅲ道跡 地蔵平道跡- |
| 財団法人 浜松市文化協会 | 1997 | 下流道跡群 | |
| 財団法人 浜松市文化協会 | 1997 | 染地道跡発掘調査報告書 | |
| 財団法人 浜松市文化協会 | 1998 | 宇藤坂古墳群 | |

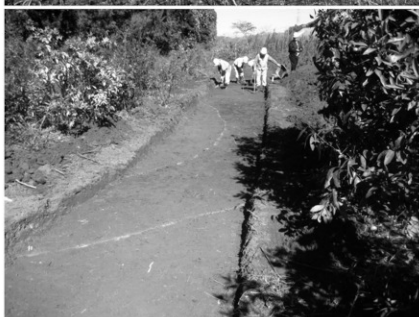
写真図版 1



A 発掘前遠景
(南東から望む)



B 発掘前近景
(東から望む)



C 試掘第1トレンチ
周溝検出状況

写真図版 2



A 遺構検出作業風景



B 発掘完了後全景
(南から望む)

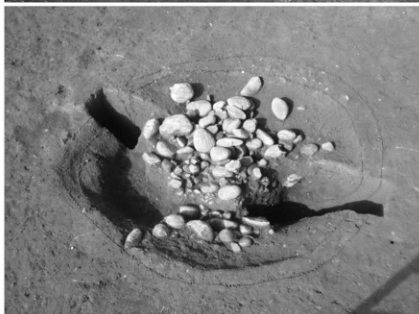


C 発掘掘了後全景
(北から望む)

写真図版 3



A 21号墳 掘了全景
(東から望む)



B 土坑1 検出状況



C 土坑1 礫群横断面



A 土坑1 掘了



B 土坑2 検出状況



C 土坑2 礫除去後
底部未発掘



A 土坑3 検出状況



B 土坑3 掘了



C 土器出土状況 1



A 土器出土状況 2



B 土器出土状況 3



C 土器出土状況 4

写真図版 7

出土遺物 (須恵器・土師器)



報告書抄録

書名	辺田平21号墳 (へだびら21ごうふん)					
副書名						
巻次						
シリーズ名・番号						
編著者名	川江秀孝					
編集機関	浜松市教育委員会					
	〒430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟					
	浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当					
	(浜松市教育委員会の補助執行)					
発行機関	財団法人 浜松市文化振興財団					
	〒430-7790 浜松市中区板屋町111-1					
発行年月日	2009年 9月30日				調査面積	632 m ²
ふりがな	ふりがな	コード			北緯	東経
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	調査期間
へだびらこふんぐん 辺田平古墳群	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 はまきたくひらくち 浜北区平口 5042-1295外、他	22202	6-01-6	34 ° 47 ' 47 "	137 ° 45 ' 17 "	2009年 2月9日～ 2月28日
調査原因	駐車場建設					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	
辺田平21号墳	古墳	古墳時代 (近・現代)	周溝 土坑		須恵器・土師器	

辺田平21号墳

2009年 9月30日

発行 財団法人 浜松市文化振興財団
 編集 浜松市教育委員会
 (浜松市生涯学習課文化財担当)
 〒430-0946
 静岡県浜松市中区元城町103-2
 印刷 中部印刷株式会社